

株式会社アドバンテスト
2018年3月期（2017年度）決算説明会 質疑応答要旨

2018年4月26日（木）

Q：ある半導体製造装置メーカーが18年4-6月期の業績見通しを下方修正した。テスト市場では調整に入る兆候は出ているか？

A：先月、今月と、かなりの数の顧客訪問を行ったが、どこも安定的な成長見通しを持っていた。ただ、米中間の貿易摩擦が我々の業界にどのような影響を与えるのか注視している。短期的に中国の顧客の生産意欲が減衰する可能性は皆無ではない。ただそうなった場合でも、中長期的に中国が半導体を必要とすることは変わらない。中国に強固な基盤を持つ当社にとって、それほど悪影響はないと考える。

メモリ需要は過去アップダウンを繰り返してきたが、中長期的には安定して伸びるので、大きく落ち込むことはないだろう。

Q：2018年度業績の牽引役となると期待している製品名は？

A：SoC向けでは、スマホ向けのプロセッサが7ナノ、10ナノといった先端ノード品にシフトしていくことで、それぞれのデバイスのテストタイムが長くなっており、V93000のビジネスが回復しつつある。

車載向けは、ADAS（先進運転支援システム）関係を含め、2017年度と同様に成長する。ディスプレイ・ドライバIC向けも悪い話はない。TDDI（Touch with Display Driver Integration）の生産増も好材料。

メモリ向けは、3D NANDで72層以上の製品が出てくることで、テストタイムが長くなるため、テスト投資が続く。また、サーバー向けDRAMの生産が増えているが、これもやはりテストタイムを長くしていくため、T5503HSなどの高速テスト、あるいはコアテスト向けのT5833のビジネスが増えてくるだろう。

Q：第4四半期の半導体・部品テストシステム事業受注の品種別構成比は？

A：メモリ・テストは、第3四半期と同様、NANDとDRAMで大体半分ずつ。2018年度の先行受注分約150億円の内訳も、NANDとDRAMで大体半分ずつ。非メモリ・テストは、SoCとコンピューティング向け合計と、MCU・パワー系・ディスプレイ向け合計で、やはり半分ずつ。

Q：現在どの程度の売上をサポートできる生産能力があるのか？

A：2017年度上期は需要に生産が追いついていなかった。ただ受注が上がり続けるなかで、売上も伸び続けており、生産能力拡大に向けた対策の効果はそれなりに出ている。第4四半期

は679億円の売上を上げており、それをサポートできる程度の生産キャパシティは現状ある。
ただ、部材の調達問題が完全に解消されたわけではない。

Q：2018年度の受注見通し2,200億円を上期、下期で分けるとどうなるか。

A：大体半々。

Q：では、メモリ・テストの見通しを上期、下期で分けるとどうなるか。

A：これも大体半々で予想している。

Q：そうだとすると、2017年度第4四半期にはメモリ・テストの前倒し受注があった影響を考えると、2018年度下期のメモリ・テスト受注予定は保守的に見ているということか。

A：顧客の新会計年度にあたる当社の第4四半期（19年1-3月期）の需要は、顧客の投資動向を読みきれないところがあり、このような受注予想となった。

Q：2017年度に計上した33億円の棚卸資産評価損影響がなくなるにもかかわらず、2018年度の売上総利益率を前年度と同程度と見ている理由は？

A：棚卸資産評価損の影響を除いた2017年度の売上総利益率と、ほぼ同程度の売上総利益率となるのではと考えています。

Q：2018年度の販管費はどのくらいで見ているか？

A：研究開発費を含め、800億円台半ばと予想している。

Q：競合他社の決算発表で、ロジックテストの見通しが急に引き下げられたが、どう考えるか？

A：彼らはおそらく彼らの顧客である特定個社のモバイルAP（Application Processor）の動向についての見解を変えたものと推察されるが、当社には影響はないと考えている。

以上

※本資料に記載されている内容は、決算説明会の質疑をもとに当社の判断で要約したものです。また本資料には、将来の事象についての、当社の現時点における期待、見積りおよび予測に基づく記述が含まれております。これらの将来の事象に係る記述は、当社における実際の財務活動や活動状況が、当該将来の事象に係る記述によって、明示されているものまたは暗示されているものと重要な差異を生じるかもしれないという既知および未知のリスク、不確実性その他の要因が内包されており、当社としてその実現を約束する趣旨のものではありません。